

潮

論

物価高の生活危機は世界の危機

そのものではないのか？

木村 宏

図書館裁判闘争の終結と我々

早大アナ 研

労働組合は革命の起爆剤になり得るか

横倉辰次

三里塚闘争の位置

安田信治

書評「虚無思想研究」

森一蘭

映画評「変奏曲」

山上春彦

物価高の生活危機は

世界の危機そのものではないのか？

木村 宏

随筆調でいこう。

物価の高騰はここ三、四年、いつこうにとどまるところを知らない。酒、たばこ、それに郵便料金も上り、次いで国鉄の運賃と電話料金も上がるということだから、この間すえ置きの商品価格は皆無と違っていいだろう。むろん労働者の賃金も、名目的

には倍増したようだが、去年も今年も、いわゆる物価指数を下まわる賃上げにしかすぎず、実質的には、このインフレ以前の生活水準より厳しい毎日を送らされている。その上この冬は天候不順とかいうことで野菜も高値を続け、春先まで下ることはまずありえないだろうとの観測がなされている。

消費者の知恵はこうした事態にあっても貧困このうえなく、せいぜい一括購入の策を講ずるか、新聞折込みのバーゲンセールめがけ、とるものもとりあえず駆けつけるほどの域を出ないようだ。それでもそういう手間暇かけることができる時間的余裕があるならまだいい方で、共稼ぎの夫婦や、一人住いの若い勤め人は、結局、割高の商品を買うはめになる。他にもいろいろ救われない連中がいるだろうが、とにかく、割のあわないのは消費者、暇のない消費者である。生活に追われる、しかも食うことに窮々としなければならぬということには実になげかわしいことである。
おそらく、われわれの両親の世代がわれわれと同じ年代であった二、三十年前も似たようなものであったにはちがいないが、しかしまだ余裕というものがあつたことはうかがい知ることができる。その余裕とは今日のようなレジャー産業に奉仕するような性質のものではないし、カラーテレビを柴煙くゆらせながら眺めることでもなく、なにか具体的に生活に密着した自前の労働のようなものだったと思う。
諸君の家庭ではどうだったかわからない

が、ぼくの父は鉄道官舎の裏庭（三十坪ほどあった）に季節の野菜を育てていて、大根、人参、きゅうり、なす、トマト、とうもろこし、枝豆、しそ、ほうれん草等々、ごくわずかな種類の野菜を除けば自給していた。庭というか、要するに敷地をそれほど設けるということが、家を建てるときの常識でもあったのだろう。むろん、都会でもである。今、当該敷地は鉄筋五階建てのアパートになっている。敷地は畑などたがやすべくない芝生である。この十年の間に消費生活と生産生活は都会においては完全に分解させられてしまった。民間アパートはいうに及ばず、社宅に類する住居空間からも八生産Vは放逐されてしまっている。われわれはもっぱら八生産Vを見知らぬ他人に依存せざるをえなくなってしまうのだ。なぜなら、通勤に一時間かけることなど今や常識であるから、時間的余裕もないのであるから。

の農作物が目立って値下りすることがないのはその好例である。物価のからくりは消費者のせひとも知りたいところであるからして、新聞、雑誌の類によく載っている。それであすればもつと安くなるはずだ、と結論が導き出されているが、産地直売と銘打った物品が食料品であれ、衣料雑貨であれ、市価の半値であることはまずないから、誰かがどこかでポロ儲けしていることだけはまちがいのないことである。はによりも人件費が上った、これはいいことにちがいない。しかし、それだけではない。今まで人件費として計上されなかつた労働が総体としての人件費に繰り込まれてきている。主婦としての実質的な労働は少なくなり、いや切りつめさせられ、女も労働を売りに出かけるようになってきたが、保育園に子どもを預ければ月三万円がところ出費を強いられるといったふうに、あるいは遠足といえは昔は文字どおり速くまで足を運んで楽しんだものが、今や電車でどこそこの遊園地にお出かけといったように、他人様に銭を払ってことを済ませざるをえなくなってきた。いく

ら金を稼いできても足りないのはこうした経済構造の転換にあるのであろう。便利になったというのは見せかけのことで、個々の事象を具体的に昔と比べてみれば絶対に貧しくなっているのだ。こうした状況を一概に資本主義経済体制が悪いのであると結論を下すのはしかし早計であるといわなければならぬ。いわゆる社会主義経済体制の下でも生活に窮々としなければならぬ労働者の情況は報告されている。問題は政府の経済政策のよしあしなんかではないのだ。目新しいことではないが、この情況を作り上げた犯人は八生産効率向上志向Vの理念であり、その表現としての都市化である。生産効率の向上志向は、まず流通と生産のスケールの拡大として進行した。やさしく言えば生産の分業、細分化と中央集権化である。自給自足の経済に比べると、流通機構を充実させた他給他足のこの生産体制は一時的に飛躍的な生産の増大傾向をもたらす。しかし、経済学の常識から言つて、大規模生産には殆んど例外なく収穫逦減の法則が働く。生産すればするほどコストがかかる傾向がでてくるのだ。都市化は生産効

率が上向いた時期の労働力補填の要請を受けて急速に進行する。そしてそれと同時に家計経済の破壊、すなわち都市生活者の消費生活一辺倒化が進行するのである。

これは戦後世界、とりわけ先進資本主義国に共通した傾向であり、ここ四、五年の間に世界の大都市はひとつの飽和状態に達しつつある。社会主義国においてもそれは例外ではない。現にブルガリアの首都ソフィアは深刻な都市飽和の危機に直面し、人口流入を規制する処置を講じているのだ。もちろん、大都市にはそれなりの文化的な誘発要素があるから、需要に見合うだけの供給がなされない事情もあるにはある。しかし、この需要に見合うだけの供給をできないほどの生産の硬直化は、現在の生産体制とその理念そのものの限界をはっきりと映し出しているというほかはないのである。新興社会主義国の首脳たちは、都市化の危険を本能的に察知し、その肥大化を未然に阻止するために大胆な下放政策を採用している。それは都市機能を根本的に否定するものではないが、農村と都市との調和を人的な流動性を導入することによって一定のバランスをとることに延命を見通している

のだといえよう。西欧の都市学者が、メトロポリスからメガロポリスへと進展する構図を描いて悦に入っているのに比べればまだましである。

田中角栄が四年程前、日本列島改造計画をひっつけて政権の座についたとき、それは公害拡散の駄案だと批判した革新陣営は、たとえば今日の東京のあらゆる意味での危機を、彼がうちあげた日本列島改造計画の刺激要因がこの物価高、インフレ傾向を作り出したのだと非難することができても根本的な都市改造、ぼくはこれを都市破壊と言いかえてもよいと思うが、を具体的に示する能力は一切持っていないのであるから、田中角栄の問題意識よりはるかに低劣なのだと言わざるを得ないである。もとよりぼくは今日ある自民党政権が都市政策に有能な集団だとは思ってはいない、それどころか生産に目を奪われて、都市住民を単なるサラリアートII消費者に追いつた無能さ、ある意味での犯罪を許すわけにはいかないと考えるものだが、金も暇もある政治家や学者が、インフレは世界的傾向だの、大増賃上げて経済は上向きになるのだの、アホなことを言っているようでは革新

もインテリも同じ穴のムジナで、死ねと言うほかないのだ。

ことは消費者が団結したところで全面的に解決するものではない。それでもとにかくやるしかないのは日々の生活を少しでも楽にとのささやかな願いからであるが、何より大切なことは、生産体制そのものの根本的な再検討、資本主義、社会主義の生産理念に共通する生産効率向上志向に変わる未来社会の青写真を一刻も早く作りあげることである。そういつた問題意識を刺激するもののひとつにクロボトキンの「バンの略取」がある。その経済学は当時といい、現在といい、一笑に付され、葬り去られた古典である。とはいえ、その経済理念を机上論としてしか成立させえなかつた現実の情況が今、まさに深刻な危機をむかえている今となつては、なにやら食指動かさずにいられないものであることも事実なのである。

それにしても経済というのはわけのわからないものである。真剣に勉強しなければいけない分野であると、こんなことを書きながらつくづく思ったことがある。

☆☆☆☆☆☆☆☆

図書館裁判闘争の終結と我々

早大アナキズム研究会

☆☆☆☆☆☆☆☆

△編集部註▽七二年秋の川口大三郎君虐殺以後、早大にまき起つた管理支配体制への反逆の嵐は、敵（早大当局、公認自治会を握り、学生を暴力的に支配する革マル及び民青）の対応の前に、物理的・主体的弱点をさらしつづ、川口君死後ほぼ一年で沈黙に陥りかけていた。この時、七三年早稲田祭の名目で革マル祭を強行しようとした革マル派とそれを容認する大学当局に抗議し、総長団交と革マル祭中止を求めて十余名の学生が早大図書館を占拠したのだが、大学当局は官憲を導入して彼らを排除し、その後彼らは建造物不法侵入容疑者として東京地裁において被告として検察をはじめとする権力体系と対峙してきていた。本年一月裁判は彼らに対し罰金刑を言い渡して終了した。この文章は、裁判へのかかわりを、被告の数名を出した早大アナ研からの総括

的な報告として文章化してもらったものである。なお、本誌五号に「早稲田大学図書館占拠闘争の軌跡」として被告昌陳等を収録しているので参照されたい。

図書館裁判闘争は、去る一月二十六日東京地裁に於ける「判決公判」を以て終結した。「被告」に対する「罰金計一万円」という「判決」が示唆するものは何か？我々は、二年近くに及ぶ裁判闘争に、主体の側から「決着」をつけざるを得ない地点に到達したといえよう。裁く者が裁かれる者の自己釈明を許すことはあつても、裁かれる立場に立つた者からの批判を封殺しうる根拠を敢えてここで述べる必要はない様に思える。とはいえ、司法権力からの「論告・求刑」そして「判決」という、窮めて権威主義的、恣意的な早大闘争に対する「解答」が、早稲田の状況的矛盾、抑圧構造に

自己表現、集団実践を以て対決していった図書館占拠闘争の行為の全体性を裁断し、抹殺していくことは、不可能であることを確認しない訳にはいかない。検事の「求刑懲役一年」と、それに対する裁判所の「判決・罰金一万円」との現象的落差の根拠は、議会制民主主義の保持によつて、表現の自由と行為の分離を策し、支配を貫徹しているブルジョア法体系の、運用の程度差にあるにすぎない。裁判所の「判決」は、「被告」団、弁護団の執ような反証展開によつて、早大当局の川口君虐殺事件以降の無為無策を認めつつも、「建造物侵入」なる罪名を容認する立場を一貫して堅持しているのである。そこには△目的▽と△行為▽の不可分性を恣意的に分離して、断罪していく法論理の欺瞞性が、霧骨に示されている。一方、裁判闘争を主体的に担つた部分が、△目的▽と△行為▽の分離を以て支配を貫徹していくブルジョア法秩序との対策構造を、徹底した反証展開と共に「被告」―「傍聴席」の分断を不断に粉砕していくことに求めていったのは、至当である。

今、我々が裁判闘争に主体の側から「決着」をつけようとする時、何が問題となり

何を問題とせねばならないのだろうか？
 かつて、叛乱大衆がもたらした行為、提示した思想（管理からの自立）は、全一に言語表現を伴っていった訳ではない。そのことが直接的な普遍性を獲得しにくいものにしてきたことは、確実に裁判闘争にかかわる過程で知覚できた。我々を含めて早大の行動者は、思想的苦闘が当事者相互では衝動的な問題提起であり得たとしても、その言語への翻訳がなければ、感覚への衝動性が薄れていくことにどれ程に自覚的であったのだろうか？ 我々は、安逸な「政治主義者」、「前衛主義者」の愚行の轍を踏むつもりは毛頭ないし、黙過するつもりもない。図書館闘争に対して、一発主義、英雄主義等のレッテルばりを以て、思想的批判などと吹聴しないし、自己弁護もしたりはしない。むしろ、その対極に我々自身を置いてきたと確信している。図書館闘争は、政治的空語と現実との落差をうめていこうとする志向性を十分に持っていたであろうし、△総長団交実現▽と△革マル祭即時中止▽の二要求項目は、十一・八以来の闘いの総体性のなかより導出されてきたと言え得る。

我々は、以前闘争の敗北は、運動の有機結合を創出し得なかつたことに起因している、と語った。それは、政治主義が器用に最大限綱領と最小限綱領を使い分け、運動を一般化していくのとは異つた地平で、むしろ、運動の具体性に於いて総体性を確定していく事に、より良く勝利しきれなかつたという意味に於いてである。運割の自己形成が、具体的プロセスの総体性としてのみ、語る事が可能だということならば、我々は、相当に△遠い所▽から問題の所在をつきとめていかねばならない。そのことは、七四、七五学費値上げをめぐる動向に内在する早稻田の状況的矛盾——現在、維持されている早稻田の「秩序」がもたらす孤絶感、困難さに規定された自身らの立場に対する冷徹な検証から始めるといふこととであろう。図書館闘争の敗北は、早大大

衆運動の途絶の結節点であり、状況的に体現された学生大衆の沈黙——行動者の離散を見えつつ展開されていった図書館裁判闘争は、そこからの「出発」であつた。我々は、一年有余の早大闘争の過程で、そして図書館裁判闘争の過程でつかみとつた八体験▽を定かなるものとして忘れない。それは、自覚的な意思に裏うちされた関係の確かさともいふべきものである。図書館裁判闘争がもたらした事実の意味をかみしめつつ、昨日の衝動が今日の不感症となつてしまふ感性の摩滅を強いる悪しき日常——ブルジョアの法秩序から、自らを解き放つ契機を、我々は、更に求めていかねばならぬ。

* * *

労働組合は革命の起爆剤になり得るか

横 倉 辰 次

□□□□□□□□□□

□□□□□□□□□□

我が国のアナキズム界に労働組合を提唱したのは明治末期幸徳秋水が帰国して、革命の手段として直接行動論即ちゼネラルストライキを紹介したのが嚆矢であろうが、当時は肝腎の労働組合が非合法的であつたからゼネラルストライキ自体が非合法的であつたゆゑ理解し難かつたであろうが、大正期に入つて大杉栄の活発強力な活動によつてアナルコサンジカリズム運動が隆勢になり、ボルヤ封建的（御用組合）とアナルコサンジカリストが日本の労働者を二分する程の勢力を得たが、大杉亡き後に八田舟三や岩佐佐太郎に依つて純正アナキズムなるものが提唱されてアナルコサンジカリズムは衰退の一路を辿つた観があつたが、革命を思考する限り労働者は、組合運動を無視する事はできない筈であるが、一九四五年敗戦以後の組合運動は、社会党、共産党の飛躍で日常斗争説を重視してそれを目的とした組合運動が隆勢を極め、スト、ゼネラルストライキも労働時間の短縮、賃金昇給のための手段とする様になつてしまつた。丁度、徳川期の百姓一揆が如何に大きな犠牲を払つても、それが農民解放、革命に継続し得ず、徳川幕府を二百七十五年間

も封建制度を存在せしめた如である。

今日、国鉄があれだけ大規模なストライキとしながら革命は愚か暴動にさえもなり得ず、無責任な政治家共に敗退するのである。大きな犠牲だけを残して。

あれだけの大規模なストライキを舉行しながら、その目的が革命でない限りは徳川期の百姓と同様な末路になるのだ。

今、老生は労働組合に就いての意見を發表するにあつて、自分の意見がアナ連時代から少しも進歩というか変革のないのと思ひ、嘗てアナ連時代、自由連合新聞で労働組合運動を特集した時に執筆した事を思ひ出して再び書こう。

読者諸君 諒せられよ

三里塚闘争の位置

— 空港をこの地にもつてきたものをにくむ —

安田信治

労働組合というものは過渡期の産物だ、組合は革命のためにあるべきものだ。組合は賃金斗争を目的とするものではない。革命遂行後の共存状態、社会のモデルケースであるべきだ。コンミュンの試作品であるべきだ。

人間は労働者であつてよい者ではない、人間は人間であるべきだ。生産機械ではない筈だ。人間は各自の必要品を生産すべき者だ。企業の利潤のために働くべきではない。とすれば人間は自治管理社会のために組織、グループを作るべきだ。組合は、そのための組織であるべきだろう。労働者だというのは人間の誇りでは決してない。まして大杉栄が言つた駄獣の如き者は。

現在、三里塚闘争は、閣議決定以来一〇年目に突入しましたが、一機の飛行機も

飛ばすことなく、私たちは闘い続けています。しかし、権力はあらゆる手段を用いて、総力をかけた開港策動を強めてきていま

す。たとえば五〇億の金をばらまいて、鹿島・神栖両町議会の反対決議をくつがえし、岩山大鉄塔の破壊用の道路の建設を強行しようとしています。これに対して私たち反対同盟は岩山の大地に深く根を下し、四千メートル滑走路を封鎖し続けている大鉄塔を武器に、空港を粉砕するまで断固として闘い続ける覚悟です。

これは昨年秋、ある集会でなされた三里塚空港粉砕青年行動隊のアピールの一節である。三里塚の国際空港建設に対する阻止闘争は、農民や労働者、学生による独自の運動を構築してきた。この一〇年にわたる闘争、それを単に時間的な尺度で測ろうとは考えないが、それにもかかわらずこの持続性をほくは改めて問いたいと思う。それは、三里塚の闘争が現代日本における反権力闘争の最前線に位置するという捉え方に対する同意以上のものである。

昨年一〇月一二日の三里塚現地集会には、六七五〇名の労働者、農民、地域住民、学生が降りしきる雨の中に結集した。大会宣言は、「決して単なる一〇年目の記念集会ではない。いままでの闘いをふりかえり、

その成果を引き継ぎ、たび重なる敵の「開港策動」を解体し、三里塚の新しい歴史の発展を画すると共に全国の闘う人民のより巨大な結合と発展を実現するための集会であることをまずもって本大会参加者とともに確認」することを、冒頭において述べている。ほくの問題意識の出発点も正にこの宣言と軌を一にしている。ただ、ここでは誌面の都合上、三里塚の近況を素描するしかできないことを残念に思う。

× ×
三里塚の現地は、今多くの困難な局面をほらみつ、権力による幾多の開港策動及び反対同盟に対する露骨な弾圧策動との闘いを続けている。

地区労働傘下の成田市役所職員労組が「空港開港促進」を突如として決議したのは昨年の五月であった。そして、全日本航空労組や鉄労成田佐倉支部等の空港関連事業労組と歩調を合わせ、九月には「成田空港対策労組連絡会連合」を結成し、開港促進の先頭に立って、卑劣な策動に加担してきた。いわゆる天誅事件（一〇月九日、市職組の甲田委員長が、市役所で執務中に訪ねてきた男と面談、その男が持参したピラを読ん

でいたところ、ピニール袋に入った糞尿を頭からかけられたという事件）への対応はその典型である。事件の容疑者として逮捕された樋ヶ守男氏には、明白なアリバイがあるにもかかわらず、成田警察と市当局、そして市職組は一体化した攻撃を展開したのである。

× ×
しかし他方では、一〇月から空港公団は関連事業者への、開港遅滞に伴う損失に対して補助金を支払う事態に追い込まれた。また地元でも、これまで空港賛成を公然と主張していた成田青年会議所や区長会が「このままでは開港に反対する」という署名集めに奔走せざるを得ないほどに、さまざまな矛盾を開港事業そのものが露呈させてきたことも事実である。空港建設計画そのものが示した燃料輸送路や土地収用面の致命的な欠陥は、政府や公団の無能さ、無責任さ、住民無視の姿勢は、闘争の過程でひとつひとつ暴かれてきた。

× ×
こうした闘いの一方で、東峰裁判を中心として数多くの裁判闘争が取り組まれてきた。一九七一年九月の第二次執行に対する激烈な闘争の渦中で、成田市の東峰十字路

において警察官三名が死亡した。裁判は現在、証拠調べの段階で、長期化は避けられず、東峰統一被告団のもとに法廷での闘いが続けられている。

私達は、「空港建設」という国家の意志に反対しました。国家はその暴力的本性をむき出しにして私達を圧殺せんとしました。結果、ここにこうして、被告人として法廷に引き出されています。ここにおいて、今、裁判という形式を通して向うが為されようとしているのかは、明らかです。これはもはや、裁判と言えるものではありません。私は裁かれているのではなく、国家の政治意志に反抗したことに對する報復を受けているに過ぎません。国家権力は私を裁くことは出来ない。それでもなお、「裁く」と言うのなら三里塚闘争を裁いてみよ。私達は、人民の意志をもって国家を断罪しよう。(小川英世)

今は亡き三ノ宮文男さんの言葉が思いだされる。もつとも人間らしく生きようと思つている人間がなんで非人間的にあつかわれるのか。そして、この地に空港をもつて来た者を憎む。……でも、先祖

より受け継がれたこの三里塚で精いっぱい生きたいと思う。他の人なら避けて通る事でも、私は簡単に物事を避けて通る事はしたくない。

(小川 裕)

書 評

『虚無思想研究』(大沢正道編)

森 一 蘭

我達は日々を快適に生きて行くのに困難な時代に、まぎれもなく居ると思えます。

いかなる時代も、そうであつた様に現代も又、象徴的なほど絶望の時代にあります。我達はそれでも、日々の営みを止める訳に行かないのであります。この様な時代にこそ思想の何んたるかを人々は探求せずに行られません。

現代の社会状況が悲痛の様相を色濃く帯びれば帯びるほど、既成の哲学、思想界に物足らなく思うものであります。時代の要請する思想と言うものが実際には存在

この引用は、東峰裁判での被告冒頭意見陳述(『冒陳集』より)からの引用である。三里塚の闘争は、これまでさまざまの形で展開されてきたし、今後も一層多様な進展を辿るであろうと思う。ほくは、より一層の関心を注いでいきたいと考えている。

しえなくても人々は自分の精神状況に見合った思想を探し出そうとするものであります。

私はこの様な時代にこそ、本当の意味での思想が新しく模索されなくてはならないと思えます。その一環として『虚無思想研究』が体裁を変えて生まれ出た意味を充分持つものとして積極的に評価したいのであります。つまり、私はこの書物が我々の生きる現代社会に於いて最も希求せられたる書物の一冊に数えられることを信じて疑わないのであります。

この日本と言う国はどんな思想でも輸入紹介する国であり、虚無主義と言う思想も東洋に伝統的（老荘思想）にある思想と、ヨーロッパから輸入したものとかの、いくつかの流れがありますが、この国の思想の底流に、いつでも流れていた水脈に、この思想はあつたのであります。

虚無主義が流行になるのは俗（悪）ぼくなつて、なんとも気恥かしく、耐えられない事ではあります、現代の様にあまりにも低く取り扱かれてゐるのも真実、なさない事であり、もつこの思想世界に照明が当てられる必要があります。一部のフアンに独占物にしてしまふには、あまりにも惜しい豊かな物が、この思想にはあります。

ところで『虚無思想研究』と言うと、無味乾燥な学術書の様に思えますが頁をくくるとわかる様に二十名にもぼる個性豊かな多士済済と言えるニヒリスト、アナキスト、ダダイスト、詩人たちのニヒリズムに關するユニークな論考、エッセイ等が縦横無尽に説かれていて人を厭きさすことがありません。本の章立は上巻下巻を通してみると虚無礼讃・無価値幻影そして自由・回

想の辻潤・無の思想家たち・反文明えとせとら・と言う様に構成されています。

この本は辻潤を中心軸としてすえ、各人の文章（論考）が、その独自性を誇りつつ幅広い裾野を形成してゐる様に見えます。それは荒川畔村が或る程度まで意図的に、この様に編集したことは、辻潤とのつながりに於いて充分に理解されるところであります。

この本にあげられた虚無思想は、決して単なる哲学的に綿密に論究せられたものではありませんが、対象に対して余裕のある態度で、それぞれの視点から独自性を充分に發揮しながら文章化してゐるので、飽きることなく素直に虚無主義に触れることができます。そしてこの本を読んですぐに気がつくことは八虚無Vと言う言葉の幅の広さであります。この点に深い魅力が、実はあるのだと言うことに気がつくであります。

上巻の「にひる・にる・あどみらり」と言う辻潤の文章に

「虚無思想」を研究すると云うことはどんなことをするのか私にも実はよくわかつていないのだ、それを研究すればそ

れがなんのタンになるのだから、ならないのだから。そんなことも私にはわからない。老子はだから「名の名とすべきは常名に非ず」と云つてゐるのではないか？

この雑誌の題名と内容とが別だと云うような抗議を申しこんだ人があるが、題名と内容が別だろうが同じだろうがそんなことは問題じゃない。どうして「研究」などと云う名前をつけたのかわからないような頭の持主はセイセイ精読してその所以を研究するがいい。

「虚無思想」と云うのは「なんでもない」思想と云うことだ、なんでもない思想を研究することはなんでもないことなのだ。

とありますが、たしかに「虚無思想研究」と言う雑誌名にしては、ずいぶんと風変わりな内容なので読者の中には、実際に何か抗議めいた事を言つた人も居たのかも知れません。

しかし、現在、この書物を通読して見ると、前に触れた様に中にはかなり筆のさえた文章があつたりして我々の興味関心を引くものがあります。

そして、人それぞれの文章がその独自性

を發揮しながらニヒリズムに肉薄せんとする意志が臆ながらにでも読み手に伝わって来ると言う事実はだれでも否めないものと思ひます。特に村松正俊の「無の世界、有の世界及び幻影の承認」「虚無感の源泉」や石川三四郎の「幻影の人生」などは、卒直に言つて熟読玩味する必要性が感じられる文章であります。

人間は幻影を食つて生きてゐる動物である。或は幻影を讚美し、或はこれに耽溺し、或はこれを恐怖し、或はそのために闘争し、或はそのために悲歎する。人間は幻影の奴隸でもある。文芸も美術も、幻影の効果によつて成立し、政治も宗教も、幻影なしには存在し得ないものである。生れながらにして生理的・心理的の錯覚を持った人間は、生きるということから、一種の幻影を意味するといふことができるのである。

「幻影の人生」石川三四郎

この文章はアナキスト石川三四郎の「幻影の人生」の最初の部分ですが、充分に人間生活の中に於ける。△幻影Ⅱ無Ⅱと言う事を様々な例を引きながら実証しようとするかのごとくであり、一切の合理Ⅱ

不合理の価値を否定しようとしてゐるのが明瞭に読み取れる訳であります。

最後に書誌的な事に関して触れますと、この書物の由来については、編者、大沢正道氏の解説——『虚無思想研究』因縁話（上）（下）に詳しく書かれてゐるので、是非、実際に読まれることをすすめますが、以下簡単に紹介いたします。

大正十四年七月に辻潤、辻潤門下、三哲の一人、占哲ことト部哲次郎、荒川畔村の三人で編集した『虚無思想研究』が通算で第八号まで出たのであります。非常に好評であつた為創刊号は七カ月後に増刷号を発売したとの事でありますが、この七カ月後に出たと言ふところにまたおもしろいエピソードがあるのでありますが、このことは大沢氏の解説にくわしいので、ここではふれません。

その後、この雑誌は装いをあらたにして大正十五年に総合雑誌として吉行エイスケ編集で三号まで刊行されます。三号雑誌で終りになるのですが、それから数年した昭和四年に再び三号雑誌となつた『ニヒル』が発行されました。

この『ニヒル』をもつて戦前のニヒリズム

ム研究雑誌の流れは途絶え、十数年を経た戦後の荒廃した敗戦日本の中から再び、荒川畔村の手によつて『虚無思想研究』が昭和二十三年六月に発行されたのであります。これは昭和二十六年四月まで第四輯、出ました。そして昭和五十年に一種のアレンジ本とでも言ひ様なこの『虚無思想研究』上下が大沢正道編で出されたのであります。この書物は戦後の『虚無思想研究』のアレンジ本であります。実質的な内容は、戦前からのニヒリズム研究雑誌の中身を受けついで物であります。最も全部、戦前のものと言ひ訳ではなく戦後、書かれた文章も入つております。

執筆者は次の通りです。

辻潤、武林夢想庵、小野庵保蔵、市橋善之助、金子光晴、ト部哲次郎、新居格、村松正俊、石川三四郎、松尾邦之助、辻まこと、西山勇太郎、菅野青顔、荒川畔村、大木一治、生田春月、萩原朔太郎、内藤辰雄、佐藤豊、自由クラブ、X・Y・Z。

『虚無思想研究上』昭和五十年九月発行、大沢正道編、発行所、蝸牛社、千三百円。
『虚無思想研究下』昭和五十年十二月発行、大沢正道編、発行所、蝸牛社、千四百円。発行人荒木清、池田勇。

映画評

『変奏曲』(中平 康 監督)

山上春彦

今回は従来よりも大きなスペースを与えられ、また本欄担当以来ちようど満一年を経過したところなので、本題の映画紹介に入る前に、私がこの欄で映画を取り扱う際の原則というか基本的な考え方について簡単に述べておくことにしたい。というのは、今までのやり方には多くの迷いを私自身が持つていて、適任者がいれば(編集部が許せば投稿でもよいと思うが)交替したいと考えることが多く、私なりに原点を再確認しておきたいと思つてゐるからである。

単なる映画好きでしかない私が、映画評とはおこがましいにせよ、映画の紹介の役割を本誌上で果しているのは、現実の情景を切り取つて再構築する映画の中に、私達のおかれてゐる情景を解明する視点を見出すための手がかりがあるのではないかという期待を持つてゐるためであり、また私

の一方的で偏見のある映画の見方や感じ方からでも、こんな映画があるのか、この映画をこんな風に見る見方があり、そう見させる状況があるのかということでも多少とも何かの刺激になればと思つてゐるためである。もちろん、それが私の一人勝手な見方であるにせよ、秋山清氏の表現を借用していえば「アナキストの映画の見方というものはあるにせよ、アナキズムの映画の見方というものはありえない」というようなことで自分を納得させて、愚にもつかぬ感想を書きつらねて本誌にのせる仕儀となつてゐるわけだが、それでも掲載誌の性格上と私自身の独断から、いくつかの制約があり、自分が見て面白かつた映画のみを取りあげて行くという風にはなつてゐない。

まず第一に、本誌発行後に、比較的どこでも上映され得る可能性のある映画を選んでいる。既成の劇場配給ルートにのらない映画は、時間的にも地域的にも限定が強く、是非とも機会があれば見るようにしてほしいと推薦できる映画以外は、意味がないと思うからこれまで積極的に取りあげてゐない。第二に、劇映画に限定されてゐるのは、これはルポルタージュやドキュメントで面白い映画や極度にそのつまらなさを問題にしたい映画がないという、それだけの理由による。ただし、劇映画である以上はすぐれたエンタテインメントであつてほしいし、面白さの中に毒を含んでおいてほしいという偏見に基づいて作品を取り扱つてゐるのは、私の好みの問題である。第三に、多少なりとも運動なり政治状況なりをテーマの一部に含むか、それについての明確な切開を行つてゐる作品のみを取り上げることにしてゐるのは、掲載誌の性格からくるものである。最後に、日本映画に限定してゐるのは、これはもうまったく私の好みだけの話で、しつて理由をつけられ、私たちがまず問題にしなければならぬ状況なり日常なりは、私たちの存在する日本のものであり、日本映画は日本の状況の投影としては外国映画よりは直接的であるか

らということになるのだが、私がそもそも外国映画を数多くは見ないということが大きな理由である。

大体、以上のような原則的制約の中から多少なりとも賞めたりけなしたりする気の起った映画を取り上げ、あとは独断と偏見に満ちた紹介と感想を書いているというのがこれまでの姿勢であり、今後私がこの欄を執筆する際の方角も同じであるだろう。

まあ、映画を見ることが好きだし、自分の見た映画について友人達と話をするのも嫌いではないからこの欄を担当しているものの、正直なところ自分は単なる映画好きで見ているだけの方が楽だし、他人よりもとりわけ鑑賞能力があるわけでもないのだから、果してこれで読者や編集部に不満はないのかと弱気になったり、いや、独断と偏見でもいいから映画について言いたいことを言っておくのが、多少なりとも何か新しい状況切開のヒントになるかも知れないから、もう少し自信をもつてもいいと思ったり、かなり迷いの出はじめた昨今である。

ともあれ、今回取り上げるのは五木寛之原作の「変奏曲」である。原作の帯に「革

命の幻を追い男と人妻が繰り広げる不毛の愛」とあつて、映画は、原作のストーリーをかなり端々に追つてはいるが「不毛」さだけが奇妙に浮彫りにされている作品となつていて、しかもそのためにエンタテインメントとしての味を殺してしまつているところが原作と大違いの結果となつてい

る。五木の作品の中でこの映画の原作が必ずしもすぐれたものではないにせよ、彼の志向するエンタテインメント小説として失敗してはいないのに、中平康のシナリオ・演出による映画化では、その持ち味が十分に活かされていないのは、この映画をラブ・ストーリーのみに切り縮め、観念的な現実描写のみによつて状況を描き出そうとした実験的試みの失敗といえるだろう。実際のところ、かなりつまらない作品で封切一本立て一〇〇〇円なら料金を返してもらいた

い気のある映画である。かつて、日本の革命運動の過程で愛しあつていた男と女が、片や亡命革命運動家として、片や男を失うとともに生きがいを失い闘争も棄てて死んだように生きることを許す資産家の妻として、偶然にパリで再会することから始まるこの映画のストーリー

は、女のエゴイメティックな愛の不毛さを描こうとして失敗し、映画による表現の不毛さを実証する作品へと転化している。

映画は五木が小説で志向する以上にエンタテインメントとして自立すべきであると思ひ、さもなければ映像表現として現実とどう切り結ぶのか、その切り口が鋭く見ている側にも伝わるものであつてほしいと思ひ、ゼニを出して見に行く側の要求である。エンタテインメントとはいへ、すぐれた作品であるなら、見ている側をも刺し貫ぬくだけの状況の切り口を持つてい

るわけだから、単なる娯楽作品であればいいというわけではないにせよ、失敗した実験作にまでゼニを払う義理は客の方にはないと思ひのが当然だと考えられる。全編海外ロケも、主要なスタッフ（カメラの浅井慎平II写真家、チーフ・プロデューサーの矢崎泰久II雑誌編集者）やキャスト（主演女優の麻生れい子IIファッション・モデル、主演男優の佐藤亜士II画家）が映画の素人であるのも、アフレコのセリフが下手な上に多少ズレているのも、そのセリフが感情を抑制した棒読み調でリアルな感じを避けているのも、シナリオと演出が

適確なら非難しなくても良いのかも知れず、それなりに貴重な実験だったと評価されるものであるかも知れないのだが、総体として失敗している以上、その試みの一つ一つをほめるほど観客は寛容ではあるまい。

失敗の原因の一つは、状況や背景の説明ぬきでも男と女の緊張関係は描き得ると思ひ込み、原作の観念的ラブ・ストーリーの部分のみを抽出して映画を構成しようとした意図が、原作の背景や状況描写を必要以上に切り縮めた上にその再解釈を怠って原作と同様の設定を安易にあてはめていることによつて、全体のストーリーの設定の成立そのものすら無意味に見えさせてしまうという状況設定のモロサによつて裏切られていることにあると思われる。

この映画の描写では、男は必ずしも亡命革命運動者である必然性はなく、女が人妻である必要もないようで、単にとある喰い違いから十何年間別れていた男と女の愛の相剋を描いているだけで、別に全篇外国ロケでなくとも済んだんじゃないかと疑わせるのだが、原作はそれほど安手にはできてなくて、男と女がそれぞれに持っている過去と現在の状況から、パリでの再会と一

週間後の別離の必然性を納得させている。

そもそも、革命運動のために国外脱出を果し、モスクワで、ブラハで、パリで既成左翼運動と抗しつゝ革命運動に賭けている男と、男への愛ゆえにのみ闘争に身を置き男を失うとともに闘争を棄て自己の生き方も棄ててしまった女の再会ということから、状況の中で移ろう愛の形を、人間の生きざまの問題として提起している原作に対し、肝心の背景描写を一切カットした形で、そうした愛の緊迫関係が再現できると思ひ込んで映画化するというのは、演出側の一方的な思い込みというしかないだろう。

男の個人史と女の個人史とのせめぎ合いが、そしてその中で自分を愛するということと以上に他人を愛するということが、どれほど当の他人の生活を脅かすエゴイスティックなものであるかということの積み重ねが、この映画の描こうとして果せなかつた「愛の不毛」のテーマであつただろうに、個人史のせめぎあいの部分、各個人の持つ生活の状況をバツサリ切り捨てたために、焦点を衷つた平板なドラマに終つてしまつているのは、中平以下制作側の誤算であるだろう。そもそもドラマとは、状況の中で、

状況とともに生きていくものさだ。ドラマから状況を逆照射することは不可能でないにせよ、その状況をどう撃つのか、少なくともどのように把えているのかという肝心の視点の明示がない限り、そのドラマが躍動する生命を持ちえないことは確実だし、状況と遊離した観念のみの操作からは、その観念の根づくべき日常を発見することはできない。

単純に結論だけを云つてしまうと、中平には「革命」を描くことは無意味な作業であつたとしても、「変奏曲」の副基調音が革命ないし運動にかかわる個人の状況という問題である限り、それを無視してはドラマは成立しえないということ、つまり完全な失敗作であるということだけだ。中平はこの作品において革命なり運動なりを描くことに失敗していると云うのではない。そこから完全に逃避しているのだ。五木の原作にはない冒頭の肅清シーンを削つたのは、運動なり状況なりを最初から無視するという中平の決意と読むにせよ、状況の中でしか生きないドラマを失敗させたのも同じ発想である。(ATG・中平プロ提携作品)

読者の声

民衆情況の把握を

拝啓 「アナキズム」九号、前号に較べ意欲的な意見が多く、興味深く読みました。二言、三言読後感を述べます。

暴力論のアンチテーゼとしての非暴力論・非暴力論の短所を認識し、かつ克服するため見られる民衆の自由に対する樂觀性✓と批評していますが、では非暴力論はというところ裏返えされた樂觀性というのがあるのではないのでしょうか？ ガンジーに於ける直接行動などを例に取り高く評価されていますが、極限状態に於ける民衆と幻想の平和に耽っている民衆との区別はなされているのでしょうか？ また暴力論批判に於いて単なる失敗または否定されるべきものと扱かわないで、ではなぜ民衆は立ち上がらなかつたのか、また自由を求めるのではなく、

それを無知、無学に求めるのは、誤まりだと思えます。

古代に於いても民衆は反逆して来たろうし、国家権力に対して戦つて来たと思えます。それを無知、無学に求めるのではなく、そのようにさせた本質は何かと探求する方が大切だと思えます。W・ライヒによると民衆には自由を求める能力が欠如していると言っています。それは単に二百年足らずの資本主義権力による抑圧ではなく、五千年以上に亘る権力支配、より正確には家父長制による性に対する抑制が民衆の自由に対する感覚を欠如させ、支配を受け入れる体制を維持して来たのだと言っています。

私には暴力論にしても非暴力論にしても、このような次元で民衆が視野の中に入っているのかどうかという事が疑問でなりません。またアナキズムの主体性ばかりが主張されて、民衆の情況、民衆自体の情況はどうなのかという事も欠如していると思えます。クロボトキンの「近代科学とアナキズム」の中にアナキズムは民衆の起源を持っているというのがあります。ならば民衆の情況をより本質に於いて把握する事が、解放へと連なるのではないのでしょうか。

それは果たして戦前と戦後に於ける民衆の観念は変化したのだろうかという問題につきながら、アナキズムの民衆への深化と反国家戦線の強化にもつながる問題だと思えます。

現象面としては確かに平和運動の隆盛、市民運動の盛り上がり等の情況で変化したのだと思いたくありませんが、しかしそれは戦前に於ける国防婦人会が民主的婦人団体へと、また産業報国会が労働組合へと、軍国主義が民主主義へと一夜にして変化したのと同じ事で、情況による対応であり、観念の覚醒による個人の自立化及び主体的参加ではあり得ないと思えます。それはいわゆる戦犯問題にしても、天皇制問題にしても単なる責任転嫁としか思えません。民衆自身が主体的に担つた戦争、それが強制によるものであれ、無自覚的なものであれ、とにかく事実として存在しているのだから民衆自身に於いてそれが統括され、批判され、そして覚醒する。この過程を避けている限り、天皇制否定は観念論に陥り、現実的過程として出て来ないであろう。だから我々が現在考えなければならぬのは、物質的横領だけでなく、五千年以上に亘る観

念の横領、その本質的なものとして本来は、天皇制は打倒の対象としてしか出て来ない民衆が倒錯的な形態で天皇制維持に役立っているという事を白日の基に照らし出し、考察せねばならないと思います。

天皇制は単に今大戦の責任という形ではなく、歴史的に神話段階から抹殺しなければならぬ。だから暴力論にしても、この倒錯した観念が見抜けなかっただけで一括否定するのは独断すぎると思います。この倒錯した観念こそ、A性の抑圧に起因V国家を支え、戦争に導き、ひいては戦後の平和運動にも連綿しているのだと思います。この倒錯した観念の打倒、それによって民衆の中に抑圧されていた相互扶助本能と反逆本能等が復活し、即国家破壊も現実性を持つてくるであろうと思います。

少々長くなりましたが、これからも良い企画を立てて頑張ってください。

誌名の変更ですけれども、私は反対です。アナキズムは限定されるものではなく、すべての反権力運動を含むと思います。G・ウドコックの『アナキズム』の中に、「権力を否定し、それと闘うものはだれでもアナキストである」とセバスチャン・フォー

ルは言ったと書いてありますが、これで良いのではないでしょう。か。「アナキズム」誌だから何々せねばならないという事はなと思います。ならぬというのこそ権力主義で、否定すべきです。(大阪 H・Y)

底辺労働運動の

実践理論としての

アナキズムの追求を

親しい友人が京都で「アナキズム」の八号を手にいれてきました。へえ、こんなものがあつたのかというところが正直な感想でした。

九頁〜一五頁の「アナキズムとテロリズム」という江口さんの小論を読みました。いたく心に残りました。たとえば、『現代に有効な思想や実践をアナキズム運動が提示しえていない』という点は、実感として痛感します。

私はあるサークルの労働者と読書会をしているのですが、残念ながら、アナキズムの理念に支えられた実践書は不勉強なせいもあり、ともかく皆無ですね。中学で、授

業がわからないまま押し出されて、中小企業で働いている人間に共感をもって受け入れられる本は少ない。組合でバリバリやっている人間からはみだしている、一生懸命生きているごく普通の労働者にも職場での闘い、人間性解放をめざしている人々の話が判かる言葉で書かれた実践録が欲しい。自分の気持ちあらわせない人間の、生活をきりひらいてゆく理念が欲しい。

今やっているのは、みんな三週間もかけてえらんだ『学習の友』です。ハッキリいって、『学習の友』は、職場のこと、組合のこと、恋愛のことetc、具体的に記されており、みんなは、俺の会社でも首きられたよ、ひでえなあ、それぞれ、身辺を受け取め方をします。それはそれでいいのですが、この雑誌のバックは日本共産党であります。その点でいろいろ問題はあるのですが、私としては、いい面はいいのだと割きついています。サロンの、観念的な所が少なく、労働者の手記などを読んでみると、それはますます感じられます。

ところで、私が最もおたずねしたかったことは、古典的アナキズムの読書会をしている方、あるいはアナキズム労働運動史、

思想史を研究されている方を知りたかったのです。

なぜなら、日本アナキズム労働運動の歴史的な批判と評価を私なりにしたいと思つているからです。キチンと学問的、理論的基盤を身につけたいのです。情念だけではどうにもならないと思つています。何か新しいものを創造しようとするなら、まず、その土台を築く必要があると思ひます。これは私が貧しい実践経験をふまえて心から感じることで、学生や、詩人や、いわゆる知識人の言葉ではなく、今、生きている本当にふつりの庶民の力となる実践理論が求められるのではないのでしょうか。今の私は、自分の力不足を感じます。

私は、現在、史学科の四年ですが、四年目にしてやつとやるべきことを見出し、留年して一年間勉強するつもりです。昨年の十月までは、四年間の生きざまの総括として卒業して教師をと考えていましたが、いろいろなことがあり、大学に残ることをとりました。

そのことは、オーバーにいえばこれから先、日本の労働運動の中におけるアナキズムの再評価・位置付けという作業を通じて、

理論面において力をたくわえるということ、同時に、具体的実践の場において行動するということを行なつてゆくということを感じています……。

私は、自分の思想をつかみたいのです。思想をつかむということは、即、それに基付いた運動に参加あるいは創造という形に結びついてきます。私は、いま、その手ばかりを得たのではないかと感じています。ただ、私をむかえいれてくれる新しい世界について、瑣末的な不安があります。

今、青年サークルにきている労働者の中に、ある人間から、"あれはSだ"と、きられていた人がいます。きらつている人もサークルの内部ではごく少数であり、日常的には、なんのさしつかえもないのですが、私には耐えられぬことです。(どちらも、人間的にはいい人です。)私たちのサークルのように、ほとんど政治色をもたない集まりでもこのようなありさまですから……。

"Sをも巻き込んでしまふ運動じゃないといけないよ。"と、少々ふてくされながら思っています。

編集部から

△読者の声▽の欄を設けました。この欄は読者と編集部、そして読者相互間の意見の交流の場としてひろく開放したいと考えています。本誌の内容、編集方針に対する意見、感想、批判をはじめ、企画に関する要望などぜひ編集部宛お送り下さい。誌面の許すかぎり全文掲載していきたいと思ひます。原稿用紙(四〇〇字詰)二枚以内。

△投稿規定▽

読者諸氏の投稿を歓迎します。

○枚数——三枚以内(四〇〇字詰)

○メ切日——一、四、七、十月の各十日

採否は当編集部の厳正なる検討の上、決定いたします。(但し、多少の字句の修正は御了承下さい。)

なお、長大論稿については編集部へ御相談下さい。連載等の処置も考えています。

送り先||東京都千代田区神田神保町2・32

大同会館内 現代思想社 気付

アナキズム編集委員会 宛

(東京 Y・T)